

海外研修レポート

平成24年7月30日(月)

1)訪問先

JICAモンゴル事務所、在モンゴル日本国大使館、日本人墓地

2)研修内容

●JICAモンゴル事務所

日本のモンゴルへの支援の歴史やJICAの協力活動の内容と今後の課題について説明と、健康管理や生活上の諸注意についてのブリーフィングを受けた。

●在モンゴル日本国大使館

清水大使よりモンゴルの経済成長の状況と今後の両国の関係について伺った。

●日本人墓地

ウランバートル郊外のダンバダルジャーという丘の上に立つ日本人墓地を訪問した。

3)所感

前日の夜遅くチンギスハーン国際空港に到着し、真っ暗な道をバスで揺られながらウランバートル市内に入り、ホテルに着いた時は午前1時を回っていた。朝からあいにくの雨で肌寒く、日本との気候の違いを感じた。年間降水量が少ないモンゴルでは「徳のある人は雨を持って来る」と言われ、歓迎されるそうだが、今年は異常気象と思われるほど雨が多らしい。ウランバートル市内の道路は冠水してしまい、大きな水たまりが至る所にできていた。交通量の多さに驚くとともに、道路や下水・排水設備を始めとするインフラ整備の必要性も感じた。

〈JICAモンゴル事務所〉

磯貝季典所長より、これまでの日本とモンゴルとの関係や支援の歴史・活動内容について伺った。モンゴルは2011年には世界で2番目の経済発展を遂げている。その一方で総人口の30%にあたる人々が1日2ドル以下で生活しているという現状を踏まえ、民主化以降に現れてきた課題などについて伺った。2012年度の日本の協力の3つの柱は鉱業セクターの持続可能な開発とガバナンスの強化、すべての人々が恩恵を受ける成長への支援、ウランバートル都市機能強化ということだ。続いて、岩井淳武次長よりJICA支援活動の状況と今後の課題について、より具体的なお話を伺った。水不足で困っていてもモンゴルでは地下水しか利用できないということや、就学率・進学率ともに高いが、学校施設の不足のため2部制を採用している学校が多く、教室が不足すると図書室や廊下を教室として利用している学校もあるということを知った。日本の恵まれた水環境・教育環境を再認識させられた。

〈在モンゴル日本国大使館〉

清水武則大使よりモンゴルの経済成長の状況について伺った。1990年からの日本の援助により、ウランバートルの停電が減少したことなど、両国の友好的な関係についても伺った。これまでは日本が支援をしてきていたが、今後は経済パートナーとしての両国の在り方を考え、民間企業の活性化を図る必要性についても語られていた。大使はモンゴルで合計9年間駐在しておられるので、日本人とモンゴル人の考え方や気質の違い、遊牧文化の変化、モンゴルと日本以外の国々との関係などについて具体的に話して下さった。最後には、日本の高校生へのメッセージとして「勉強ばかりせずにモンゴルの大きな自然の中で生活したら、物の見方も変わるだろう」というお言葉をいただいた。異文化交流を通して、広い視野で世界を見つめさせることが必要だと感じた。



清水大使と懇談

〈日本人墓地〉

ここはモンゴルの日本人墓地の中でも最大規模のものだ。管理人のネルウェイさんが詳しく説明をしてくださり、第二次世界大戦中に12,000人を超える日本人が抑留され、その内1,500人以上の方が亡くなったことを知った。現在

の両国の友好的関係の証として建てられた慰霊碑は夏至の日に太陽が真上を通るように設計されているそうだ。平和の大切さを強く感じさせられた。



慰霊碑

JICAモンゴル事務所の方々や清水大使は、予定時間を超えてまで私たちの質問に丁寧に答えて下さった。両国の関係や国民性の違い、現在のモンゴルが抱えている課題などがよく分かり、これからの研修の指針となると思われた。モンゴルの人々が日本に興味を示すように、日本人もモンゴルのことを知ろうとしなければならぬと感じた。

ウランバートル市内には、ロシア、韓国、中国など多くの国からの資本や製品が入ってきている。モンゴル人は親日的だと言うが、モンゴルに滞在している日本人の大半がJICA、大使館職員であることを考えると、もっと多くの日本人がモンゴルを訪れ、文化交流や経済交流に努め、互いにパートナーとして発展していくことが大切だと感じた。

平成24年7月31日(火)

1)訪問先

新モンゴル高校、セイブ・ザ・チルドレン

2)研修内容

●新モンゴル高校

校長先生から学校紹介の後、サマースクールの授業を見学。一つのクラスで高校の教員3名が日本文化紹介等の授業を行った。

●セイブ・ザ・チルドレン

子どもたちと折り紙やおもちゃ等で交流し、よさこいを披露した。

3)所感

新モンゴル高校は、日本の大学で学んだ校長先生によって、日本の進学校をモデルに設立された。特に日本語や英語教育に力を入れており、卒業生の多くは海外へ留学している。校長先生のお話では、国際社会に通用する人材の育成を目指そうとする、熱い思いを感じるとともに、学校や教職員、生徒たちを誇りに思う気持ちが伝わってきた。また、「今後は教育の原点に戻り、『生きる力』を伸ばしたい」という言葉が、日本と通じるものがあり印象的だった。見学したあるクラスでは、日本人教師が心理テストを取り入れたユニークな日本語の授業をしており、生徒たちもいきいきと学んでいた。授業をさせていただいたクラスでも、日本語で挨拶をしたり、四国の学校の映像に興味深そうに見たり、私たちが快く受け入れてくれた。



書道の作品贈呈

セイブ・ザ・チルドレンはウランバートルでは唯一の施設で、様々な事情を抱えた子どもの生活・学習支援をしながら、状況を変えるための話し合いを続けている。当日は10名弱の子どもがおり、中には最近出産した17歳の女の子もいた。相手の男性はいないという。初めは皆緊張気味だったが、輪になり簡単なゲームをすることで、少しずつほぐれて人懐こい笑顔が見られた。私たちは日本の遊びを「教えよう」という意気込みだったが、むしろ子どもたちの「教えたい」気持ちが強く、知っている折り紙をして見せたり、中国コマ回しを手取り足取り教えてくれたりした。さらに、日本の小学生が書いた手紙をもらおうと、目を輝かせて「何て書いてあるの?」と尋ね、通訳してもらおうとそれを友だちにも説明する姿に感動した。



この日の振り返りでは、1回りの交流でなく、これからも何らかの形でつながっていくことの大切さを話し合った。

計画にはなかったが、新モンゴル高校では増田先生、セイブ・ザ・チルドレンでは桜井さんという日本人に出会い、

その活躍ぶりを知ったことも、私たちにとってよい刺激となった。

平成24年8月1日(水)

1)訪問先

ガンダン寺、UNハビタット(ゲル地区)、青年海外協力隊員との懇談(JICAモンゴル事務所)

2)研修内容

●ガンダン寺訪問

1911年創建の仏教寺院。1938年ソ連によって破壊されるが、1990年に再建。高さ26メートルの仏像(モンゴル最大)などを見学する。

●ゲル地区訪問

ウランバートルの中心部からバスで20分ほど、郊外の丘の斜面に家が連なっている。生活環境の改善のため国連の機関UN-HABITATとJICAが地域の住民と協力して事業を行っているところを視察する。

●青年海外協力隊員との懇談

5名の隊員から、現在の活動の内容や隊員になろうと思ったきっかけなどについてお話を伺う。

3)所感

〈ガンダン寺〉

ロシアによる支配の歴史の中で、国の象徴のような仏教施設を破壊されたり、多くの人々が殺されたりするなかでも、たくましく生きてきたモンゴルの人々のしたたかさのようなものを感じた。1990年まで再建されなかったというのは、モンゴルが社会主義体制でロシアの影響を強く受けていたせいであろう。ロシアへの反発はなかったのかと、通訳のバヤンさんに尋ねると、デモとかそういうものはなかったという。デモもできなかったのだろう。私の知る社会主義体制と実際にその中で暮らすということには大きな違いがあることに間違いない。

〈ゲル地区訪問〉

人口がウランバートルに集中し、周辺部のインフラの整備が追いついていない。上水道の設備がないため、UN-HABITATとJICAが地域の住民と協力して、給水所を作り運営している。幹線道路に通っている水道の本管からパイプを引き、ここの給水所で1リットル(TG(≒0.06円))で販売しているとのこと。ここの給水所を利用しているのは400～500世帯の人たちだそうだが、隣の給水所は給水車で水を運んで来て、ためておくタイプだそう。生きるために必要不可欠な水であるが、蛇口をひねればいつでも清潔な水が出てくる日本とは異なり、水を確保することが大変な暮らしを強いられている人たちがたくさんいるということを目の当たりにして、日本での自分の生活に思いをはせることになった。

〈青年海外協力隊員との懇談〉

お話から、どの隊員も真摯な態度で活動を行っていることが伝わってきて、感銘を受けた。特に学校で教員として活動している先生方の話から、不十分な設備や少ない備品のもとで、手作りの教材教具を利用して授業を行っていること聞き、苦勞の一端を垣間見たような気がした。また、午前中訪問したゲル地区に限らず、学校でも水が出ないことが当たり前であったり水道の設備が少なかったりするらしい。そのほか、言葉(モンゴル語)や文化の違いからストレスを感じることも多いとのことだったが、ある程度おおらかにやらないといけないのだろうと感じた。隊員の方の一人が「日本でできない人は海外でもできない」と言われたが、本当にその通りだろうと思った。



水を汲みに来た人



〈青年海外協力隊員を囲んでの夕食〉

夕食をともにしながら、モンゴルでの様々なこととお聞きすることができた。その中で、驚いたことに小学生のころに高知県の大方に暮らしていたという隊員の方がいて、私も大方に住んでいると言うと、お互いにびっくりしてしまった。また、彼が当時通っていた小学校は、私が以前勤務した小学校であり、広い世界の中で本当に奇遇な出会いだった。

平成24年8月2日(木)

1)訪問先

廃棄物処分場、Tシャツアート展、第97学校訪問(ウランバートル市内)

2)研修内容

●廃棄物処分場

ウランバートル市廃棄物管理能力強化プロジェクトが進められている廃棄物処分場を見学。埋立地の様子を見ながら担当職員にお話を伺った。

●Tシャツアート展

ウランバートル市内中心部の遊園地内で行われていたNPO砂浜美術館(高知県黒潮町)のTシャツアート展を見学。

●第97学校訪問

ウランバートル市内の学校を訪問。校長先生のお話の後、施設見学。この学校に理数科教師として派遣されている青年海外協力隊員のお話も伺うことができた。

3)所感

廃棄物処分場では、埋立地を見降ろす丘で、それぞれにいろいろな思いを抱きながら長い時間を過ごした。埋立地で働く人々の様子を見ながら、質問は尽きることがなかった。丁寧に案内してくれた職員は、日本のゴミ処理場に研修に行ったこともある青年。廃棄物処理について博士論文を書いているところだという。別れ際、「現在のプロジェクトが終了し、運営がモンゴルに任される2020年にまた見に来てほしい」と力強く話してくれた姿に、モンゴルの明るい未来を見た。移動のバスの中では、参加教員の住む地域のゴミ処理システムが話題に。“Think globally, act locally”という言葉があるが、自分たちのコミュニティにおけるゴミ問題について考えるきっかけとなった。

Tシャツアート展では、事前に申し込んでいた教員の作品もあり、感激の様子。地元メディアの取材も受けた。砂浜美術館の西村さんは、100枚のTシャツをスーツケースに入れて持って来たそう。現在活動中の隊員も数名かけつけ、青空にはためく白いTシャツをバックに、モンゴルとつながる日本の若者の生き生きとした笑顔が印象的だった。

第97学校は、小中高の生徒数が2,200名の学校。午前・午後の二部制で、数学に力を入れており、エアロビクスでも実力校だそう。校長先生に教育方針を伺うと、「『モンゴルのために』と思える心を育てる」との答えが返ってきて考えさせられる。新しい校舎の入り口には、モンゴルの国旗と並んで日本の国旗のプレートが掲げられていた。夏休み期間で生徒たちはいなかったが、この学校に派遣されている清水隊員が、現場での取り組みをスライドを交えてお話ししてくださり、具体的にイメージすることができた。



廃棄物処分場の見学



Tシャツアート展



小学校玄関のプレート

平成24年8月3日(金)

1)訪問先：自然博物館、民族博物館

2)研修内容：博物館の視察

3)所感

昨夜、高知県出身で、モンゴルで日本語講師をしている小路さんとの交流を兼ねた食事会が盛り上がり、23時過ぎまでとなった。少々疲れが残っているなかでの視察となったが、開発されていないモンゴルの大地だからこそ今なお発掘調査もされていて、何と自然博物館では日本人の発掘家とも会うことができた。地質、恐竜、宇宙・・・世界共通の夢があり、恐竜の卵の化石など太古のロマンにふれることができた。

※撮影禁止のため写真はなし。

平成24年8月4日(土)

1)訪問先：ホームステイ

2)研修内容：ホームステイ／遊牧生活体験(1日目)

3)所感

待ちに待ったゲルステイの日がやってきた。男性1班、女性3班に分かれてのゲルステイ。9時にホテルを出発し、途中スーパー等に立ち寄り、道なき道を行き12時にゲルに到着した。晴れ渡った空、見渡す限りの大草原。ゲルの前には馬5頭とたくさんの牛。驚いたことにゲルにはパラボラアンテナ、ソーラーパネルがあり、携帯電話も生活の一部として当たり前のように使用されていた。まずはスーターツァイでもてなしを受け、緊張もほぐれた。お昼ごはんはゴリルタイシユル(肉うどん)をいただき、その後は楽しみにしていた乗馬体験だ。引率のパーチカがブーツに入れたiPhoneから流れる洒落た音楽を聴きながら、大草原を馬に揺られながら4kmほど離れた山のふもとまで散歩した。馬をつないで岩山に登り、景色を堪能し、しばし休憩した。帰路、馬は家が近づいてくると嬉しいのかギャロップで帰宅した。おやつにチーズ、アーロール(固いヨーグルト)、スーターツァイをいただきほっと一息ついた。そして、お土産で持って来たfrisbeeをしたり、隣のゲルを訪問したり…あっと言う間に晩御飯の時間になり、通訳のトーヤが粉を練って作った麺の入ったツォイワン(蒸し焼きうどん)に舌鼓を打った。夕食後はゲルの外で天体観測だ。満月で明るかったが流れ星も見られた。北斗七星、カシオペア座など日本で見慣れた星座もモンゴルではいつもより輝きを増して見えた。その後、ゲルの中で地図を広げ、現在地やトーヤの出身地を教してもらったり、いろんな話をした。トーヤは学生時代、親元を離れ親戚のゲルから通学していたそうだ。6月に国立モンゴル大学を卒業後、ガイドの仕事を始めたばかりだ。「モンゴルを発展させるために日本語を勉強した。日本から学ぶことがたくさんある。金持ちが幸せとは限らない。自分にあるものに満足できたら良い」という彼女の人生観に心を打たれた。心配されたトイレも大草原の中で問題なくでき、耳栓をし、寝袋にくるまり、幸せな夜が更けていった。



乗馬体験をした馬



ソーラーパネル付きゲル



食器洗い中

平成24年8月5日(日)

1)訪問先：ホームステイ

2)研修内容：ホームステイ/遊牧生活体験(2日目)

3)所感

ホームステイ2日目。アムラーさん達から「草原の日の出は美しい」と、昨晚聞いていたので、いつもよりはやく起き、日の出を見ることに。辺り一面草原なので、日の出の瞬間がはっきり見え、その美しさに心奪われてしまった。朝食をとった後、他のグループのゲル訪問に馬に乗って向かった。途中、アムラーさんがポケットから取り出したのは、携帯電話。まさか!と思った瞬間話し始めた。「草原では、携帯電話は使えないはず。」と、決めつけていた考えがもの見事に崩れ去った瞬間だった。馬の上での携帯電話。想像もしなかった光景に思わず笑ってしまった。仲間のゲルに向かう途中アムラーさん達は、私たちが馬に乗って怪我をしないよう、細心の注意を払ってくれていたにも関わらず、何度もトゥートゥーと連呼し馬を走らせようとしていた自分が恥ずかしくなった。1時間の乗馬後、無事仲間達にも会い、次の目的地に行こうとした時、バヤン(通訳)がゲルの人たちに挨拶をしていこうと提案してくれた。突然の訪問だったが、ゲルの人たちはスーターツァイやボールツォグを振る舞ってくれ私達を快く迎えてくれた。後から聞いた話では、ゲルの近くに来たときには中に入り声をかけていくのが礼儀だということだった。広いモンゴルの中で、つながりを感じた瞬間でもあった。馬乳酒を造っているというゲルに行った時も、先ほどのゲルの人達同様私達を招き入れてくれた。1泊2日という時間の中で、家族のぬくもりや人々のつながりを感じる事ができた2日間だった。私達のために、行動を共にしてくれたアムラーさん。「沢山食べてね。」とおいしい料理を作ってくれたオユナーさん。そして、沢山の笑顔のホリ君達。みんなと会えた事に心から感謝。



草原の日の出



草原での電話



ホームステイ先の人々と

平成24年8月6日(月)

1)訪問先：テレルジ(子どもキャンプ施設)、亀石見学

2)研修内容

●テレルジ子供キャンプ施設訪問

ゴルビ・テレルジ国立公園にある子供キャンプ施設を訪問した。代表者から概要説明の後、子供達と交流(日本の遊び方教室等)、施設見学を行った。

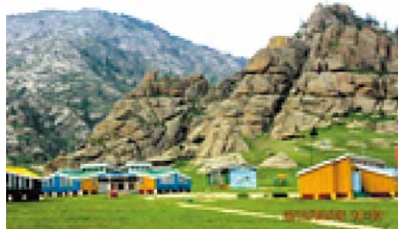
●亀石見学

風雨によって亀のような形に浸食された花崗岩の巨石を見学した。高さが15mもある。地元では人々の信仰の対象になっており、願いをかなえる力があるとされている。

3)所感

研修も終盤となった。ウランバートルからテレルジ国立公園まで約70kmの道のりを移動する。バスの揺れにも慣れ、週末のゲルステイについて情報交換を行う等、車内での会話は尽きることなく続いた。車窓から線路が見え、何両もつながった長い列車が通過した。前日の夕方に中国を出発した列車で、乗客には、衣類等をザハ(市場)で売る人々がいること、国境では線路の幅が変わるため、車輪を交換するとの説明を受けた。ゴルビ・テレルジ国

立公園に入ると、緑の林、川、岩山という景色に変わり、別荘やキャンプ場が多くあった。標高1,555m、カラフルな建物が並ぶ子供キャンプ施設に到着し、バスを降りると高原の涼しい風に包まれた。



岩山の麓にある子供キャンプ施設



福笑いに挑戦



みんなでよさこい鳴子踊り

子供キャンプ施設では、総合マネージャーのウランティミグさんから概要説明を受けた。この施設は、日頃、勉学に励んでいる子供がリフレッシュすることを目的として運営されている。6月から夏休み期間中に2,000人が施設を利用し、現在は7歳～17歳の約40人が6つのグループに分かれて活動している。新聞づくりや運動会など毎日イベントが行われ、今日は、ファッションショーが実施されるとのことであった。亀石の見える屋外の広場に集まり、リーダー杉田さんの指導で子供たちとの交流が始まった。現地の教員も参加し、全員が輪になってゲームをしたり、日本の遊び(凧あげ・福笑い・折り紙)をしたり、モンゴルの子供たちと和やかに触れ合うことができた。最後に、法被を着てよさこい鳴子踊りを踊った。軽快な音楽に合わせて皆で踊り、レクリエーションの時間は瞬間に過ぎたように感じた。昼食の後、施設内を見学した。施設では10人程度が1部屋で生活しており、訪問時には、ファッションショーの準備中で、植物の葉を利用して服を作る予定とのこと。子供たちは、我々の質問に対してすぐに応答してくれるだけでなく、子供たちの方から「モンゴルと日本の学校はどのように違うのか」などの質問があり、積極的に関わってくれた。どの子供も素直な態度で我々を受け入れてくれたように感じた。子供たちと直に接することから、また、エネルギー溢れるモンゴルに魅了された。

平成24年8月7日(火)

1)訪問先：JICAモンゴル事務所,モンゴル国営ラジオテレビ局

2)研修内容

●JICAモンゴル事務所

- ・磯貝所長に研修内容を報告する。
- ・高知-モンゴル親善協会の小路氏より日本に留学した生徒たちを紹介され交流を行った。

●モンゴル国営ラジオテレビ局

- ・局の説明及びラジオ制作の見学をする。
- ・日本向け短波放送にゲスト出演する。

3)所感

各自が記録を担当した日の活動報告を磯貝所長に行ったが、皆さん報告内容をとても的確にまとめて報告して、この研修の充実ぶりがうかがえた。磯貝所長からも同様の言葉をいただいた。

高知県出身の小路氏から日本に研修に行った生徒たちを紹介された。当初予定にないことであったが日本語で交流ができて良かった。短期間で日本語を習得する能力は感心するばかりであった。小路氏によるとモンゴル人は非常に聞く能力が高いので言葉を習得することができるとの説明があったが、それだけでなく日本人のように外国語に対する壁を作らないことも要因の一つであろう。

モンゴル国営ラジオテレビ局訪問も小路氏の計らいで急遽行うようになった。日本向けの短波放送にもゲスト出演するなど嬉しい想定外の出来事が多くあった一日であった。



ラジオ出演の様子

※海外研修レポートは参加教員の皆さんが分担して作成しました。

参加者氏名

名前	県名	所属学校名
石原 康代	香川	香川県立観音寺中央高等学校
大西 結加	香川	高松市立国分寺北部小学校
曾根 健介	高知	四万十町立七里小学校
山崎 功子	高知	高知県立高知南高等学校
和田 加奈	高知	宿毛市立山奈小学校
杉田 亮介	高知	土佐市立波介小学校
今村 加代子	高知	高知県立高知追手前高等学校
池田 やよい	愛媛	宇和島市立津島中学校

※敬称略

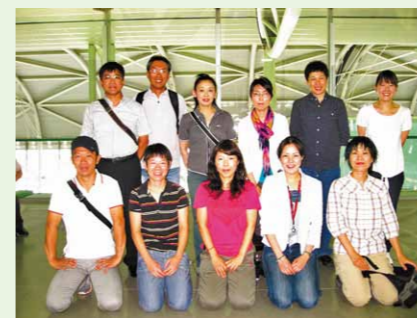
同行者氏名

名前	県名	所属学校名
坂山 英治	高知	四万十町立七里小学校
山内 桂	高知	JICA高知県国際協力推進員
横山 仁美	高知	高知新聞社 記者

※敬称略

同行者よりメッセージ

国際理解教育・開発教育の現場に関わりはじめて約1年。これまでの海外経験はあるものの国際理解教育に関わりはじめてからの海外渡航は今回が初めてでした。おそらく、ご参加くださった先生方も同じ気持ちを持たれたと思いますが、本研修で私たちが得た情報・知識を日本に帰って子供たちにどう伝えるか、伝えたいことがあります。研修中から試行錯誤を繰り返す毎日だったような気がします。もちろん、撮影した写真の数は皆さん計り知れず…観光としての旅行ではなく、帰国後に広く市民に還元することを目的としているだけに、普通の観光旅行とは違う目線からの写真を撮られた先生方も多くいらしたのではないのでしょうか。モンゴルの際限なく広がる青い空とまばゆいばかりの星空の下でのゲルホームステイ・水道のない生活、一方ウランバートル市内の舗装されない道路の土埃など、日本ではなかなか体験できない日常がモンゴルのそこにはありました。教育現場視察では、クラス編成や到達目標など日本との違いを実感し、モンゴルの人々との交流により、日本の常識が世界では通用しないことも学べる貴重な体験となりました。各先生方は帰国されてから、授業実践に取り組みますが、是非この体験を継続的に国際理解教育に取り入れ、異文化に対する理解と相互協力のできる国際的な子供たちの育成にお役



立ていただけるようお願いしております。そして、廃棄物処理場で説明してくださったスタッフの方が仰っていた「10年後に日本の協力がなくても自立して操業している私たちの姿を見に来てください」とのお願いに応えられるよう、みなさんとのつながりを大切にし、10年後、是非またモンゴルを訪れたいと思います。

平成25年3月

JICA高知県国際協力推進員 山内 桂